

## 気分転換活動により強度行動障害患者の行動を変化させる試み

～日中活動時間を増やすことによる行動の変化について～

長江和香\* 圓井和恵 矢島玲子

国立病院機構鳥取医療センター看護部 5 病棟

### An attempt to change the behavior of patients with severe behavioral disturbance through mood-changing activity

— Changing behavior by increasing the duration of daily activity time —

Nodoka Nagae\*, Kazue Marui, Reiko Yajima

The 5th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

\*Correspondence: 鳥取市三津 876 番地 5 病棟

#### 要旨

重度の知的障害、精神遅滞に起因するコミュニケーション機能障害を有する脳性麻痺の 40 代、女性の A 氏には、それに基づくストレスから来る強度行動障害があり、異食や興奮を示すために、日常は高柵ベッドでの生活を強いられており、日中の活動時間は少ない。病室内では、ベッド内で、大声を発したり、ベッドの上に立ち飛び跳ね奇声をあげたり、2 枚使用しているマットの間に潜るなどの行動があり、ストレスに反応したものが現われているのではないかと考えた。そこで、高柵ベッドから離床し、絵本が好きなことや、人との関わりが好きであることを考慮した気分転換活動を毎日繰り返すことにより、日中の活動時間を増やす試みを行った。その結果、活動中は笑顔が多く見られ、嬉しい、楽しいなどの気持ちの表出がみられた。その中で、大声や奇声を発したり、2 枚マットの間に潜るなどの行動が増すことはなかった。以上より、気分転換活動を毎日、長く続ければ、強度行動障害の軽減に有効である可能性が示唆された。鳥取臨床科学 10(3), 120-123, 2018

#### Abstract

Patient A is in her 40s and has suffered from cerebral palsy with communication dysfunction caused by severe intellectual disability and mental retardation, which cause stress that results in a severe behavioral disturbance. She consequently exhibits pica and agitation, and therefore, she is forced to pass her days in a bed with high side rails, and little time is spent performing activities in the day. In her hospital room, she would exhibit behaviors on her bed such as calling out in a loud voice, standing on her bed, jumping, and making strange cries, and going into between the two sheets of matting, which was thought to appear as a response to stress. Therefore, by getting her out of the bed with the high side rails, and repeating mood-changing activities daily based on the fact that she liked illustrated books and interacting with others, we attempted to increase the duration of daily activity. As a result, she often smiled during activities, and she expressed feelings such as joy and happiness. Also, there was no increase in behaviors such as shouting, making strange cries, and going

between the two sheets of matting. Therefore, it was suggested that if mood-changing activities are continued every day for a long period, it might help to reduce severe behavioral disturbance. Tottori J. Clin. Res. 10(3), 120-123, 2018

**Key words:** 重症心身障害児(者), 脳性麻痺, 強度行動障害, 気分転換活動; children and persons with severe motor and intellectual disabilities, cerebral palsy, severe behavior disturbance, mood-changing activity

## I. はじめに

重症心身障害児(者)は、重度の知的障害、精神遅滞を伴っており、コミュニケーション機能に障害があり、自らの心身の不調を言語で訴えることができないことが多い。しかし、周囲の環境や相手の感情等は、機敏に感じ取っている。環境がうまく合っていないと、人やその場に対する嫌悪感、不信感が高まり、行動障害を起こしてしまう。強度行動障害の患者は、自分の体を叩いたり、食べられないものを口に入れたり、危険に繋がる飛び出しなど、本人の健康を損ねる行動を取り、周囲に影響を及ぼす行動が高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要である。

A 氏には強度行動障害があり、異食、興奮があるため、余儀なく、日常は高柵ベッドでの生活を強いられている。現在、週に 1～2 回、日中に療育活動やディルームに出るなどの活動を行っているが、活動時間以外は高柵ベッドで過ごしているため、日中の活動時間は少ない。岡田ら<sup>1)</sup>は、「精神遅滞をもつ人は、理解力、対処能力の不足から、些細なストレスで容易に心因反応を起こしうる。」と述べている。A 氏の場合、ベッド内で、時折、大声を発したり、ベッドの上に立ったり、2 枚使用しているマットの間に潜るなどがみられ、このストレスに反応した行動には、日頃の活動量不足も関わっているのではないかと考えられる。

そこで、高柵ベッドから離床し、日中の活動時間を増やすことを目的とした気分転換活動を実施することで、A 氏にとってのストレス軽減、身体機能低下防止や余暇活動の充

実となり、その結果、A 氏に、笑顔が多く見られたり、大声が少なくなるなどの変化が現れ、ひいては行動障害に変化が起こることを期待し、本研究を行った。

## II. 方法

### 1. 患者紹介

A 氏. 40 歳代, 女性.

病名は脳性麻痺で、遠域式発達検査では、言語理解 0.9 歳、発語 0.7～0.8 歳、対人関係 0.9 歳に相当する。異食、ベッド上で飛び跳ね奇声をあげる等の興奮という強度行動障害を示す。

### 2. 研究期間

平成 29 年 9 月～11 月.

### 3. 介入方法

- 1) カンファレンスで、A 氏の気分転換活動について検討した。
- 2) 気分転換活動を実施した。
  - (1) 好きな絵本を、日常ベッド内で過ごす際に渡した。
  - (2) 昼食は、見守りで車椅子移乗後、ディルームで自力摂取とした。
  - (3) 車椅子で病棟内を散歩した。
  - (4) 歩行訓練は、スタッフ 2 名で両脇を抱えて介助をした。
- 3) 気分転換活動中の様子を、チェックシートに記入した。
- 4) チェックシートに、気分転換活動中の表情、笑顔の有無、発声の有無など、反応を記入し、評価した。

## III. 倫理的配慮